

日本に生息するチョウのなかで、人間による自然破壊の影響をもっとも強く受けているのが草原性のチョウだといわれている。せまい国土にこれほどまでの数が必要かと眉をひそめたくなるゴルフ場開設のために、いったいどれだけの自然が失われたことだろうか。チョウの発生にふさわしい草原の減少は、もちろんゴルフ場開発だけではなく、営農形態の変化によって定期的な草刈などが行われなくなって単調なススキ原へと変化したことも大きいだろう。土手や堤防にあっては逆に河川工事など人為的開発によって自然環境を大きく変えてしまったことが影響していると思える。絶滅危惧種指定となったなかで、かつては北海道をのぞく本州から四国・九州にかけて広い範囲で普通にみられていた草原性チョウの代表格：オオウラギンヒョウモンが、いまでは中国地方と九州の一部だけでしかみられなくなっている。

ここで話題にしたいウラギンスジヒョウモンは、もともと一度に複数個体をみられるようなチョウではないが、2012年に**絶滅危惧種Ⅱ類**の選定チョウとなってしまっている。やはり、幼虫時代を過ごすための草原性環境の減少がその大きな要因だと思われるが、筆者がウラギンスジヒョウモンに初めて出会ったとはっきり思い出せるところは1993年の夏に訪れた妙高笹ヶ峰高原である。広い牧場があって、家族で散策できる広大な草原もあり、休憩場の屋根軒下部分が分厚い藁仕立てで独特のむんむん感を漂わせており、なぜかその壁面などにミドリヒョウモンやメスグロヒョウモンがたくさん集まっていて、そのなかにウラギンスジヒョウモンとオオウラギンヒョウモン、それに比較的珍しいクモガタヒョウモンも混じっていた。草原に咲くアザミやヒヨドリバナなどにはウラギンヒョウモンとギンボシヒョウモンが多かったがオオウラギンヒョウモンはいなかった。



一般的に、あのチョウにはいつごろどこにゆけば会える、といいきれぬ種はいくらかあるが、通常、ウラギンスジヒョウモンは、会いたいのであそこに行こうなどと簡単にいうことができない種である。ところが、ありがたいことに発生時期となれば必ず出会えるのが兵庫県加古川市だ。希少種となったチョウをあえて採集したいという困ったチョウ愛好家がいるので具体的な発生場所は示せないが、かなりのスピードで飛び交う姿を確実に観察できるところだ。しかし、このチョウの写真記録をとろうとしても、アザミの花があるのになかなかその求蜜現場には出くわせずもっぱら飛び交う姿をみるだけということが続く。それでもあきらめずに活動がそれほど活発化しない午前の早い時間帯なども訪れて機会をうかがっていたら、やはり努力はするもの。いき



なり目の前のブッシュに舞い降りて休息する場面に出くわしてじっくりとビデオ撮影ができた。こうした時間帯を知ってさらに二度目の撮影チャンスも得て、木の葉上に静止して翅を開閉する場面もしっかり撮影で

きた。あとはアザミなどの花を訪れるシーンを撮りたいし、生活史も追ってみたいものだ。